

第一部

魔法がかけられた時間

～時がたつのも忘れて～



ケンムンを追え！！

仲新城 直樹

私が住んでいた地域にはガジュマルという樹があって、その樹には「ケンムン」と呼ばれる妖怪が住んでいると言われていた。ケンムンは、遭遇すると相撲をとらされ、こちらが勝負に負けると命を奪ってしまうという恐ろしい妖怪なのだ。このケンムンの話は私たちのような子どもが作った単なるおとぎ話ではなく、親や祖父母ですら知っているいわば伝説のようなものだった。

私が小学二年生のころ、児童が登り危険だということで、小学校の校庭の隅にあったガジュマルの樹が伐り倒されることになった。しかし、工事の途中で作業員が謎の事故に遭い、ガジュマル伐採計画は白紙、ガジュマルは今まで通り校庭の隅に植えておくことになった。聞けばそのガジュマルは父が小学校に通っていたころから、ずっとあるそうだ。私たちは子どもながらに、ガジュマルに住むケンムンの呪いだと言われ、やがてケンムンを探し出し、実際に対決しようという計画を立てた。図書館で見つけたケンムンの絵本によると、ケンムンは夜に現れるらしい、そして、勝負に負けるとやはり殺されてしまうそうだ。そうして訪れた計画実行の夜、私は友人二人とともに小学校へ向かった。昼に見ている学校の雰囲気とは全く異なり、夜の学校は真っ暗で人気もなく非常に不気味だった。ドキドキしながら私たちは明かりもない校庭を進み、とうとう例のガジュマルの前まで辿り着いた。しんとした静寂の中で、虫の声だけが響いている。私たち三人以外には誰もいない。しばらくその場で待機していたのだが、何も起きる気配がない。なーんだ、やっぱりケンムンなんていないのか、と帰ろうとしたとき、ザワザワっと樹の枝が騒いだ。私たちはびっくりして慌ててその場から走り去った。今思い返すとあれは単に風が吹いただけなのかもしれない、あるいは、猫が樹の上に登り動いていただけなのかもしれない。しかし、私はあれはきっとケンムンのしわざだと信じている。勝負しても勝つ実力のない私たちを威嚇して逃がしてくれたのだろう。そうするとケンムンは、環境を破壊する人だけを懲らしめる心優しい樹の守り神なのかもしれない。と言っても断言はできないので、諸説ある。ということにしておこう。

最後に余談を一つ。先の話は私が小学校のころの出来事であるが、10年以上経った現在も同じようなことが起きているらしい。庭のガジュマルを切り倒した夫婦の娘が、深夜に車を運転していたところ、崖から転落して亡くなったそうだ。そして、詳しい事故の原因は未だ明らかにされていない。あくまでこの話は地元の友人から噂程度に聞いただけなので、事故自体本当にあったのかどうか不明だが、もし本当だとすれば、、これもケンムンの呪いであろうか。信じようと信じまいとあなた次第である。



僕が見たものはなんだったのか

～山の中に広がる不思議な光景～

春山 宝謨

僕が小学校3年生だった時のある日、奇妙な体験をした。授業終わりの放課後、仲の良い友達と近所にある大きな森に遊びに行き、探検ごっこをしていた時の話である。森とは言っても、散歩道や歩くことのできる道は決まっているのだが、その日僕たちはいつも歩いている道の途中で今までに見たことのない新しい道を見つけた。その道は真っ直ぐ奥まで伸びていて、僕たちはワクワクした気持ちで奥へと進んで行った。しばらく歩くと森を抜けた。

すると、見たことも聞いたこともない昔じみた町が目の前に広がった。大きな、大きな凱旋門のような門がとても印象的で、今でも鮮明に覚えている。人影は全く見えなくて、遠くまで歩いて戻れなくなったら困るので、その日はそこまでにして帰った。また後日に、ここに来ようと約束をして。

それから一週間くらいして、約束どおり同じ友達とその町まで行こうと再びその森を歩いた。しかし、その時には前に通ったあの道が無くなっていて。奥まで道が続いているとはとても思えないくらい、木々が生い茂っていた。きっと道を間違えたのだと違う所も森の至る所を歩いてみたが、その時に見つけた道は見つからなくなっていた。親に聞いてみても、違う友達に聞いてみても、「そんな町見たこともない。そんな道ない。」と全否定された。

今でもその時のことを一緒にいた友達と話すのだが、あの時に見た町はなんだったのだろうか。あの道はなんだったのだろうか。僕のこれまで生きてきた中で、最も不思議で奇妙な体験であった。

